

2005. 11月号

アスリートのための キャリア・トランジション勉強会

Newsletter No. 12

2005年 11月18日

第12回

アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

【目次】

1. 「アスリートのキャリアトランジション 研究者の立場から」
 ゲスト：豊田則成（とよだ のりしげ）氏 _____ 1
2. 第12回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会
 アンケート集計結果 _____ 5
 2005年11月18日 勉強会参加者一覧 _____ 7
 次回勉強会スケジュール _____ 8

第12回目の勉強会は豊田則成氏をゲストにお迎えしお話をいただきました。下記、主宰の田中ウルヴェ京の考察として報告いたします。

1. アスリートのキャリアトランジション 研究者の立場から

今回のゲストはアスリートのキャリアトランジション研究では大変有名でいらっしゃる豊田先生。数年前から日本スポーツ心理学会でお見かけし、お話をさせていただいた経緯があり、今回の勉強会にお越し頂くことになった。

今回は、通常の勉強会のスタイルであるインタビュー形式ではなく、レクチャー形式でお願いした。以下、抜粋でご報告する。

豊田氏： 皆さんこんばんは。ただ今ご紹介にあずかりました豊田です。アスリートのキャリアトランジションというと、少々格好いい言葉なんですけども、私が研究を始めたのは、10年前ぐらいなんですか。最初は競技引退というテーマで始まりました。

今日準備させていただいたものは、私が取り組んでいる中のほんの一部になります。そのあたりを皆さんと考えながらできればということで、あえて完結的なものというのは準備してきていません。ですから、皆さんからいろいろとご意見をいただければと思っています。

研究者としての豊田先生のスタンスとしては次のようにお話された。

豊田氏： 私のスタンスです。お呼びいただいた田中先生や重野さん、お2人が中心でやっていたらいいものですから、最初に言うておかなければならないのは、私自身はそんなに大したスポーツキャリアというのは持っていないということです。筑波大学の体育専門学群というところでバスケットボールを、インカレなんかにも出た経験はございますけれども、そんなにさほど箸にも棒にもかからないバスケットボールプレーヤーだったと思います。ただし、アスリートの人格形成には強い関心を持っていますので、すごい著名な選手がいると、その近くに行って質問をして、いろいろな話を聞いていく中で、いつもそういうことを繰り返していると、また何か変なやつが来たなというのは特に最近では見られています。

アスリートが自身の経験を語ることに研究の視点を最近では置いています。ですから、競技引退であったりとか、キャリアトランジションのテーマを一番に追いかけていたのを、ちょっとその時期を過ぎてしましまして、アスリートたちの「語る」ということにポイントを置いています。ただ、キャリアトランジションの移行期に体験する、精神的、身体的、物理的ストレスを軽減し、よりスムーズな移行を促すことを目指す立場とは、若干異なる立場であります。というのは、先ほどもちょっとそちらの控室でお2人と話をしていたんですけど、なぜ人はスムーズに移行期を過ぎなきゃならないのかということを考えております。

やっぱり個が発達していくときに個人のスピードがあるだろうし、それはおそらく本人には分からないんだと。そのスピードコントロールをついついしたがるんですけど、正解な場合もあれば、不正解な場合もあるなというのが私の実感です。という話を先に進めていきたいと思っています。

そして、豊田先生は、「アイデンティティ再体制化」という言葉の意味、その誤解の危険性などをお話になり、先生ご自身は「アスリートの生涯発達の観点からとらえることの必要性」を感じ論文にまとめられたことをお話された。

先生は、「アスリートとしての経験が、その後の人生にどのような意味を持つのか」ということを関心事の根幹にされている。そのための一つとしては、東京オリンピックのころにご活躍をされた方たちに一人一人お話を聞いて回った経験もお持ちになる。

先生は、現役引退をしていく選手たちをこう捉えている。

豊田氏： 10年近くやっていた研究、そこでの成果というのはこういうところに集約をしてみました。競技引退というのはアスリートにとって重要な、重大な発達の危機であり、人格の発達や成熟にとって大きなチャンスになるというふうに考えています。ただ、競技引退に直面している選手たちはそれぞれではない。チャンスどころかつらくてしょうがないという経験をしています。でも、私の目からすると、いいチャンスだなというふうにも思います。

引退期です、移行期、トランジションですけども、そこはアイデンティティ危機であり、この時期の社会化予期と時間的展望がアイデンティティ再体制化に伴う課題で、取り組むためにも必要条件になるという、非常に難しいことを結論づけました。今から考えると、これは何じゃらほいという気がする。何で難しいことばかり並べたのかなと後悔しています。そのときに京先生からメールをいただいて、キーワードを拾ったところ、ソーシャルロックという言葉があり、これはなるほどな、というので使わせてもらいました。私が言っている社会化予期と時間的展望をプラスして、掛け算して、マイナスして、割り算したものがソーシャルロックというような感じがします。

注釈をさせていただくと、おそらく先生がピンときてくださった「ソーシャルロック」の意味と私のその使用とは若干意味が違ふと思われる。というのも、私がキャリアトランジションのキーワードとして使っている「ソーシャルロック」は、「引退していく選手たちが、社会から見られている、社会からこうあるべきと思われる『社会時計』に惑わされず、ゆっくりと自分の人生を自省しながら、焦らず本当にやりたいことを見つけていくことが大事だ」という話をする時に、「ソーシャルロック＝他人が勝手に決めつける社会でのあるべき人生時計に惑わされるな」という意味で使っているからだ。

しかし先生のお考えになっていらっしゃることも非常に納得。勉強会の最後には、私の意味するソーシャルロックと先生のお考えには、結局「かぶさっていること」もあったという理解をした。

おそらく、べつの意味での自分のソーシャルロック形成というのも大事なのかな、と試してみたりした。

先生はさらに続く。

豊田氏： アスリートである自分の再吟味と引退に向けての模索期を含むプロセスで積み重ねられた課題は、その後の人生の中で再び問い直されることになる。これも難しい表現をしているんですけども、選手によっては競技引退をしたら華々しいキャリアにすぐにトランジションするケースというのは、

まれなんですけども注目されます。強いて、あたかもそういうふうにトップアスリートがトランジションしていくんだらうなというような気風のようなものは漂っています。ただ、そこも一部だと思います。

でも、そのキャリアトランジションをスムーズにしていくということは、ある種そこで、もっと深く考えておかなければならない課題を積み残して次にいっているんじゃないかなという感じがしてなりません。だから、これも先ほどちょっとお話したんですけど、スムーズにその時期を通り過ぎるということは何を意味するのか。今日は何を意味するのかというのをお土産に持って帰っていただければなと思います。

このあたりから、豊田先生はパワーポイントを用いての説明に入っていたので、報告書には詳しく記していくことができない。しかし、キーポイントのみ下記に記す。

選手は引退をどうやって考えるのか：

- 1) メダルを取ったから、もう目標達成したから、じゃあ、やめようかということ。ここまでやれた、もう十分、自分は取り組んできたことにもう満足しているということ。
- 2) 敗北体験。負けた、こんなに一生懸命やってきたのに負けた。これ以上できない、やめた、ということ
- 3) 競技力とか体力の低下。思い通りに動けなくなった、もうそろそろ引き際だなということ

社会化予期：

そろそろやめなきゃな、そろそろ競技引退だから引退のトランジションしなきゃなという、「そろそろ」という感じ。これが予期です。それを予期すると、ここが非常にドラマチックなんですけれども、アスリートというのは引き際とか幕引きへこだわりがあります。何々大会に優勝してからやめようとか、この大会が終わってからやめるとか、メダル取ってからやめるとかということをするわけです。

ここで起こっているのは、実は時間的展望の逆転が起こっているなということに最近気付きました。時間的展望というのは、こういうことになります。今まで自分がどういうことをやっていて、これは過去です。過去にどういうことをやっていたのかということをやまず押さえていく。じゃあ、将来はどういうふうになりたいんだということを考えていく、これは未来です。じゃあ、今ある自分はどう取り組むべきか。こういう流れでたぶん皆さんの思考は成り立っているんだらうと思います。

今まで何をやっていて、じゃあ、こうなりたいから、今から私はこれをやるの。これを時間的展望の感覚といいます。ただし、これが幕引きとか引き際を考えたときには、逆転をします。つまり、未来の方が先にくるんです。この大会までは頑張ろう、じゃあ、今は何をしようかというところで、順番が若干逆転をするんです。こういう現象があるなということに気付きました。

選手時代という過去の意味づけ：

アスリートは、引退するとき、引退した後で何かをやったりするときに、自分は現役時代どういうふうな選手だったんだらうと。どういうふうにしておけばよかったんだという具合に、いろいろな意味付けをすることで、どんどん進化をしていくということが言えるんじゃないかなと思っています。

トランジション時に悩む選手が克服するには：

引退に関連する悩みを克服するためには、つまりアスリートたちが、今、やめようとしている、あるいはやめたことで悩みを持っている、そういうときの解決の仕方というのは、今、大変だから、それをう

まく乗り越えようというような課題にするんじゃなくて、その手前の現役の在り方に立ち戻る必要があるんだということが言えるんじゃないかなと思います。つまり、自分の過去を整理をしてから現在のものに立ち向かう、しかも未来のビジョンを持っていこうということになるろうかと思います。

勉強会は、約45分の先生の講義とその後45分近くの質疑応答で非常に盛り上がった。

私自身の強烈なワードは：

- ◆ アスリートのトランジションは、それまでの競技人生が非常に凝縮しているという意味でも、そのトランジション期の心理状態は中年期の前倒し
- ◆ トランジションで悩むことは、もしかしたらスムーズにトランジションを通り過ぎることよりも良いこと
- ◆ 過去の意味づけ
- ◆ 自分を捨てるということをすることで見つけるものは結局、本質は捨てていなくて、単に本質を見つめ直せたということに過ぎないこと

ということだろうか。

人生の発達段階を登っていくなかで、常にそのベースにある信念や哲学が、自分の選手時代とまったく変わっていない、変えなくていい、という自覚こそが、私自身のトランジションの長いトンネルの一つを通過する大きなきっかけだった。そのことがこの勉強会で、ふと認識できた気がした。トランジションは終わるものではない。つねにつねに節目は繰り返される。そして、20代の時期には悩み続けた「早くトランジションを通過したい」と思っていた自分にはもはやいい。なぜなら、トランジションをして、選手でない自分自身を作るというプロセスを必死にやった先にあったものは、まさに「選手マインドの自分」であったからだ。その意味で、ファーストキャリアでもセカンドキャリアでもない、まったくもって「過去と変わらない田中京の人生」を、今後も常に自己の限界に挑戦し続けながら、「必死に」楽しみたいと思っている。

(田中ウルヴェ京)

— 豊田則成氏 プロフィール

2001年3月 筑波大学大学院博士課程体育科学研究科修了、博士（体育科学）取得。

2002年4月 大阪成蹊学園大学設置推進本部顧問、2003年4月 びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部講師（現在に至る）。

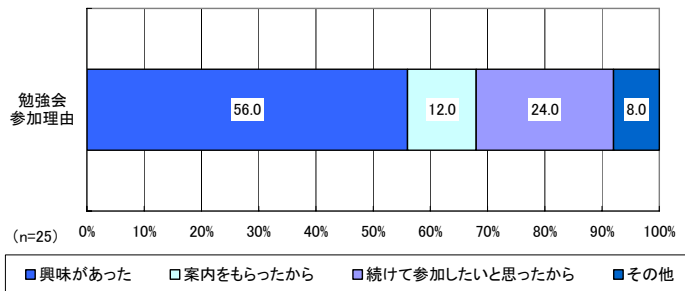
研究テーマ：アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化、アスリートの転機についての語り

（最近は、もっぱら全国に散在する元オリンピックの「人生についての語り」を拾うべく、インタビュー調査で全国行脚中。）

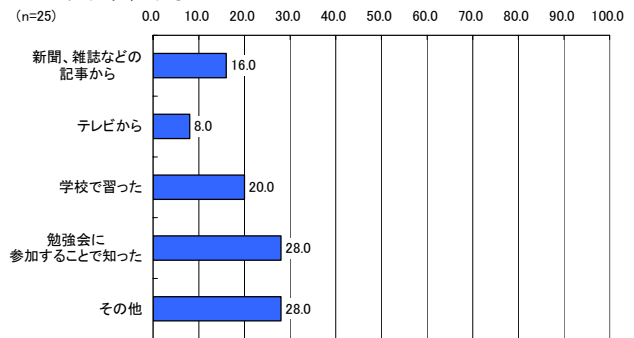
2. 第8回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会 アンケート集計結果

アンケート総数：25

1. 勉強会参加理由



2. 興味、関心について



3. 勉強会はどうだったか。

- 大変有意義で元オリンピック選手などトップアスリートの方々の人生にはとても関心があります。
- よい勉強になりました。
- 私とは考え方が逆の立場であったので新鮮であり、色々と考えるべき問題が見つかったように思います。
- 「語り」については Human Resource の世界でも、クライアントとの間のインタビューでも、全く同じ経験をしています。クライアントの「成功体験」や「失敗体験」に関してプロセスの中で、成功にも失敗にも必ずその人の「価値観」があるのだと思う。この「価値観」を見抜くことこそが大切であり、例えば失敗体験を将来の「糧」にするためには、この価値観に気づく、そしてその価値観を伸長させる。アドバイスもできるのではないかと思います。
- とても奥の深いお話でした。まだ自分の中でこなしきれいていません。
- 大変よかったです。
- とても興味深かったです。面白く拝聴しました。スポーツ選手の話でありながら一般の人でもあてはまる内容で、個人的には階段を上がれなかったらステップを1、2段下がってみたいというところが参考になりました。
- 現在「アスリートの引退について」勉強しています。今回のお話をお伺いして頭の中が混乱しました。混乱するほど、いろんな内容が聞けてよかったです。混乱の中に本質が見つかる気がしています。
- いつもとはちがうトーンで勉強になった。実際のインタビューの音を聞かせていただいたインフォーマントに感謝。
- 自分に知識がなさすぎて消化不足を起こしているような気がする。これを機会に「キャリアトランジション」について考えて生きたい。そして自分の考えたこと、学んだことを選手のサポートの一部としてもって行きたいと思います。
- 私は卒業論文のテーマがセカンドキャリアについてのもので、中でも（トップ）アスリート、スポーツ選手のキャリアにとっても関心があったので初めてですが参加させていただきました。大変有意義で貴重な話をお聞きできたと思います。またぜひ参加させていただきたいと思います。
- 毎回ですが、大変参考になりました。
- 自分の領域外のお話しが聞けたので、大変興味深かったです。質的研究の難しさや、利点についてよくわかりました。
- 難しい内容でしたが、非常に興味深いお話を聞かせていただき、ありがとうございました。オリンピックの生の声から、多くを学ばせていただいた気がします。自分自身のセカンドキャリアについて、考え、活かしたいと考えております。本当にありがとうございました。
- 途中から参加でした。遅れてすみません。
- キャリアトランジションがスムーズでなくても良い、というのは新鮮だった。
- 途中参加の為、十分なコメントができませんが、充実した内容と感じ、はじめから参加できなかったことを残念に思います。
- 実体験をまじえて大変興味深いお話を伺わせていただきました。
- 示唆に富む、話、刺激的でした。新たな課題が見つかりそうです。
- 初めて勉強会というものに参加させていただき、非常にためになりました。どういったものかわからず参加してしまいましたが、また次もぜひと思っております。
- 研究者の立場の話が聞けたので非常に有意義でした。今までと違いセカンドキャリアに対して客観的な意見は良かったです。
- 研究内容については大変よくわかりました。ただ、トランジションをスムーズに行う為の課題について

でのディスカッションがあればよりよかったと思います。

- 非常に興味深かったです。特に「移行は、各人それぞれの過ごし方でいい」というお話が印象に残りました。またぜひ参加させてください。

4. 日本のセカンドキャリア支援の現状

- 現状は見えてハイな見ることができない。
- セカンドキャリア支援は、不十分だと思う。
- 今日のフロアから質問もあったようにセカンドキャリアはアスリートだけの問題ではないと思います。
- 現状は不十分である。
- 最近はいろんなところで「セカンドキャリア」ということばを聞くようになった。アスリートの周りの人の騒ぎだけではなく、「アスリート」自身ももっと意識しなくてはいけないのではないか。
- 申し訳ありません。自分の考えがまとまったらまた書かせていただきます。
- まだまだ不十分ですが、いろいろな面でセカンドキャリア支援の必要性について議論されるようになったと思います。
- 具体的な支援は、まったく足りていないと思います。
- セカンドキャリアのみではなく、アスリートの生活支援ということを含めて、スポーツの位置づけを考えて。例えばセミプロ的な企業による支援ができるようになるとういのですが。。一昔前の日本リーグのようには戻れないのでしょうか。。？やはり経済的に困難なのでしょうね。
- 研究が進んで恵まれている。
- 視野が狭い（就職斡旋とだけとらえている）。美談的にとらえている。
- 仕事の紹介、及び精神的な移行に関して充分ではない状況にあるのではないかと思う。スポーツの視点ではキャリアアトランジションではあるが、ビジネス側からかの視点では有能な人材を発掘するというこのはずであるが、現状ではあまり注目されないことが残念である。
- 全く不十分だったものが最近動き出したように感じています。
- 次の仕事の斡旋程度なのではないかと思います。
- まだ、不十分です。競技に専念しているアスリートは視野が狭くなっているのもっと視野が広がるようなところ（教育などの分野）からの改革が必要ではないかと思います。
- 目標を達成するという観点から非常に貴重な体験をしているにもかかわらず、それを他社に伝えることができずに評価されないという現状があるように思います。
- セカンドキャリア期のネガティブな面（元〇〇選手が〇〇事件。。みたいな）が、メディアをにぎわしたりして、そのスポーツにネガティブな印象を持つ子供達がいれば残念。もっとこちらの活動にもメディアなどが焦点を当ててもいいとおもう。

5. 今後の勉強会にて議論したいこと

- SCに必要な講習学科。
- 失敗ではありませんが、非常に苦労した人もしくはトップを目指してトップになれなかった人とかの話の聞けたら面白いと思います。
- スポーツキャリアの汎用化について
- 引退したアスリートからどうやって魅力を引き出せるか。例えば Cal Ripken, Jr. は今でも商品の価値が高い。（うまく伝えられないけど、こんな感じのこと）
- 現状で特に思い浮かびません。
- キャリアアトランジションに成功した・失敗したと思われる人の競技生活時代の取り組みから傾向と対策を考える企画
- 現役アスリート（為末大選手など）
- 中高・大学生への指導という点から話をぜひ伺いたいです。

6. ご意見

- アスリートが自身で現役中に気づくこと、そのために現役中に競技を全うするかということに専心できるようにしてあげればいいと思います。
- アンケートをもっと商品として捕らえてもいいのかな（経営側が）
- わが国における潜在的な有能なビジネスマンとして位置づけることができ、共有の認識をすればよいと思います。
- 地域との密着や社会貢献活動など、アスリートだからこそできる分野の仕事があるといいと思いました。
- 高校・大学の部活動、特に強豪校の選手や指導者を対象に講習会を開いていただきたいです。

2005年11月18日 勉強会参加者（敬称略）

赤尾 剛義	石黒 雅広	いぬかいともこ	魚住 剛一郎	岡 ともこ	影井 宏秋
久保 悠也	小林 智香	小林 美幸	木幡 日出男	近藤 優美子	佐瀬 毅
佐藤 寛晃	佐野 毅彦	柴田 宗範	杉本 達朗	鈴木 理裕	高橋 裕幸
高峰 修	谷口 美幸	野村 るり子	羽原亜紀子	濱野 憲一	松尾 康男
宮倉 麻里子	李 成俊	井上 教太			

第13回勉強会
2006年1月13日(金)18:30~20:00

ゲスト
こばやし かずあき
小林 一光 氏

プルデンシャル生命保険株式会社 首都圏第一支社第5 営業所長

テーマ
アスリートの心理スキルは、ビジネスでも大いに利用できる
～ビジネスで使うライフスキルについて～ (仮)

場所
ミスノエスポーツ

事務局: 有限会社MJコンテス

東京都港区白金 4-13-4-1F

TEL 03-3447-2890 FAX 03-3447-2893

田中ウルヴェ京

清水栄子・柏浦美樹

ご意見・ご質問などございましたら事務局までお問い合わせください。